北海道医歌人会詠草

春の祈り

士別　竹内（たけうち）　幹夫（みきお）

春の風樹々の奥処にささやけり眠りを破る森の目覚めを
ひかりさす苔のしづくのかすかなり時の粒なる命をあつむ
幼き樹ら葉をひらきあふ声を立て杜は祈りのかたちとなりぬ
鳥の羽根月のかけらを打ちにけり夜気のひかりを森は映せり
青嵐ほつる枝葉を渡りきて若きいのちの息づくを見つ

日常茶飯事

滝川　村田（むらた）　英俊（ひでとし）

会わぬよう鈴を鳴らして道歩く熊よお前も会わぬよう歩け
墓地にきて熊は足跡残しゆく一万年後化石とならん
我老いて知能犯には勝ち目なし光る留守電にまた来たと知る
雪道に埋もれた車に手を貸せば去り際の礼はクラクション二（ふた）つ
世の中はスマホ歩きにあふれてる　平面ばかり見てんじゃないよ！

トドマツ

札幌　浜島（はまじま）　泉（いずみ）

トドマツの裾を彩る金色はカラマツならむ　並木のに似て
名月の光を招く　寝室の南の窓に隙間をなして
散るモミジはや降る雪にしだかれて　紅葉の色が染みだしあはれ
枯れ葉帯　松の緑とスキー場雪が積もりてパッチワークに
夢の旅帰宅の先は生家なり　四十年前失せけるところ

冬日考

釧路　児玉（こだま）　昌彦（まさひこ）

身近なる友次々と旅立ちて死の実感の迫る厳冬
窓ガラスに激突したるトラツグミ雪に埋もれ暫し動かず
スーパーの卵の棚の空白は何万規模の処分の証
沖縄と東京の息子が救援にゴミに埋まる老親の家
辛いこと幸運もあった我が人生静かに想う大晦日の夜

ある患者

北広島　古屋（ふるや）雅三知（まさみち）

この日まで如何なる道を来しものぞ　見舞う人無く一人病む身よ
声掛けど醒めた冷たき眼を向けて心許さず黙して語らず
若き日の希望（ゆめ）は何処（いずこ）で失せにしや　流浪の涯（はて）の患いの身よ
手紙無く面会も来ぬ身にあれば便りは僅かななけなしの金
未払いの病院代は嵩むのみ更なる治療に二の足を踏む

揺らめく灯影

函館　水関（みずせき）　清（きよし）

雁木抜け　暖簾くぐれば橙火（ほたび）あり　囲める人の灯影（ほかげ）揺らめく
冬と鍋　将軍たちのせめぎ合ひ　攻略法を四人で探る
働きて得たもの与え子の腹を　満たす安心　血肉になること
黒葡萄　洗へば零れ　冬麗の地層に眠る貝殻のうへ
それぞれの白息あつめ　ハイタッチ　通学路行く子らの大寒